

「喜んでささげる」(コリント九章六〜一五節)

1 貧しい人々のために

二千年前、エルサレムに誕生した教会、そこからはじまったキリスト教、やがてそれはローマ帝国という広大な領域へ広がっていきます。その道筋をつけた人物がパウロにほかなりません。

この使徒パウロ、キリスト教の迫害者から伝道者へ大転換をとげた彼は、アンテオキアの教会を拠点ないしわば母教会として、三回の大きな宣教旅行を敢行し、たくさんの手紙を書き、アジアからヨーロッパへ、迫害や苦難をのりこえて伝道し(コリント一章)、各地に教会を建てたのです。ローマの信徒への手紙一五章に次のように書いています。

こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝えました。このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました(19-20)。

「イリリコン州まで」の意味に関して学問的にもいまだはつきりしないところがあるようですが、それはともかく「あまねく宣べ伝えた」という言葉に注意すれば、ここには自分に与えられた宣教の使命を十分果たしてきたというパウロの自負、思いが表れているように思います。

こうしておよそ三〇年にわたって、ひたむきに伝道に打ち込んでいたパウロでしたが、彼にはずっと気がかりな課題が一つありました。それは教会全体の母教会ともいふべきエルサレム教会のことでした。申し上げたようにキリスト教はエルサレムからはじまり、そこからローマ世界全体へと広がっていった。パウロら多くの有名・無名の伝道者の活動によってローマ各地に建てられた教会は異邦人の教会として大きく発展していったわけですが、エルサレムの教会はユダヤ人らの迫害が激しくなり、その上飢饉なども重なって(使徒 1:27-30)、困窮し、貧しくなっていたのです。このエルサレム教会を援助するというのがパウロの課題であり、祈りでした。ローマの信徒への手紙一五章、先ほどのつづきに、ローマ帝国東部の伝道を終えて、そこにはもう働く場所がない、最後は、帝国の西端、イスパニアにまで伝道したいという願いを記しつつ、その前にしなければならぬことがあるとしてこう書いています。

しかし今は、聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります。それで、わたしはこのことを済ませてから、つまり、募金の成果を確実に手渡した後、あなたがたのところを経てイスパ

ニアに行きます (25:28)。

ここに表明された、エルサレムの教会、その貧しい信徒たちを援助するという思いをパウロはかなり早くから、エルサレムの使徒会議らいもっていたようです (ガラテヤ 2:10)。またそれを実行していました (使徒 24:17)。そしていま最後の働きを前に、改めて募金し、それを届けようとしているのです。マケドニア州というのはギリシャの北部です。またアカイア州というのは、その南部、そしてそこにコリントの町もあります。パウロはその地域の異邦人教会の援助金をもってエルサレムに赴こうとしています。イスパニアに行く前にどうしてもしておかなければならないこと、それは援助金を確実に届けるということでした。

2 心に決めたとおりに

今日の聖書箇所コリントの信徒への手紙口、第9章は、まさにこのアカイア州コリントの教会にあてて、募金を呼びかけている箇所です。

「募金」という言葉を使いましたが、この箇所ではさまざまな言葉で言い換えられています。聖なる者たちへの「奉仕」(1)、「贈り物」(5)、「奉仕の働き」(12)、「奉仕の業」(13)、「施し」(13)などです。聖徒の中の貧しい人たちを助ける、援助することをパウロは呼びかけているのです。

その意味でこの箇所はパウロによる献金の勧め、といってもよいと思います。彼は献金を奨励するのにどう語っているでしょうか。興味深いところです。パウロは何よりもこう言っています。

各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです (7)。

「各自・・・こうしようと心に決めたとおりにしなさい」というのが、パウロの献金の勧めの第一です。

使徒言行録五章にアナニアとサフィラという夫婦のことが書いてあります。この2人は土地を売って、それを献金としてもってきたのですが、代金の一部を、全部だといって差し出したようです。ペトロは、なぜごまかしたのかと、二人がうそをついたことをとがめて、その上でこう言っています。「売らないでおけば、あなたのものだったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになったのではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」(5:4)。「神を欺いた」というのはきびしい言葉だと思えますが、それは彼ら夫婦が「自分の思いどおり」しなかったことの結果だとペトロは言っているわけです。代金の一部であっても、これを献金しようと心に決め、そのようにしていれば問題はなかった。心に決めた通りにしなかったということが欺く結果になった。この二人は、アナニアがペトロの言葉を聞いてその場に倒れ、後から来たサフィラも、

同じくごまかしたことを指摘され、倒れて死んでしまいました。心に決めたとおりとは下心無く、単純な気持ちで、神にささげるということを含んでいます。これがパウロの献金の勧めです。

次にパウロはここで献金の祝福を語っているように思います。

あなたがたはすべてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念を引き出します。なぜなら、この奉仕の働きは、聖なる者たちの不足しているものを補うばかりでなく、神に対する多くの感謝を通してますます盛んになるからです(11-12)。

献金にともなう第一の祝福は、いうまでもなく、それが具体的に窮乏を救うことになるということです。この場合はエルサレム教会の貧しい信徒の生活をささえ、それを助けることになるということです。

第二の祝福は、神に対する感謝の思いが生み出されるということです。こうした感謝の思いが援助された者たちに生み出されるとすれば、それによって与えた者たちも祝福を受け、惜しまず施すようになり、そうして彼らはますます富める者となるだろうということです。

しかし私どもが最後にここから聞きとる献金への、もつとも大きな動機づけは神ご自身が惜しみなく与える方であり、その恵みに私どもがあずかっている、そのことへの感謝にあると言わなければなりません。

神は、あなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業に満ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせることができになります。「彼は惜しみなく分け与え、貧しい人に施した。彼の慈しみは永遠に続く」(8:9)。

神ご自身が貧しい者に惜しみなく分け与える方だということ、私どもはそれにあずかっているということ、この慈しみに対する感謝(15)、この感謝が私どもも喜んでささげる、施すことを促すものなのです。

3 施し

ところでイエスは山上の説教の中で当時のユダヤ教徒の信仰生活の重要な営みを三つ上げて、それをどのように行うべきか説いています。三つとは、施し、祈り、そして断食です(マタイ9章)。

最初に上げられているのが施しです。施しとは神の憐れみのしるしとして貧しい者に対してなされる施与です。ユダヤ教では善行の一つとして重んじられていました。イエスもこれを勧めています(マルコ10:21)。また救われた収税人ザアカイは自分の財産の半分を貧しい人に施すと人前で宣言しています(ルカ19:8)。初代教会もそれ

を熱心に行ったことは使徒言行録によって明らかです。

山上の説教のイエスは施しが虚栄のためになされてならないときびしく戒めていまずし、パウロも同じく全財産を貧しい人に施しても愛がなければ空しいと述べています（1コリント 13:3）。しかし施し、貧しい人を助けることは否定されない。その重要性は今も変わりません。

宗教改革の時代、貧しい人を助けるため「共同金庫（財庫）」というものがつくられたことは、あまり聞いたことがないかもしれませんが。それが最初にもうけられたのはルターのいたヴィッテンベルクの教会です（小田部進『ルターから今を考える』参照）。

共同金庫というのは教会の中におかれた大きな木の箱、金庫のことです。鍵が三つあって教会員の遺言などで残されたものや献金などをためておいて、貧しい人を助けるために使われたものです。私は昔シュマルカルデンという小さな町のルターとゆかりの深い教会で、その箱を見たことがあります。一度ぜひ見たかったので、そこにあるよといわれ、びつくりし、かなり興奮して触ったりしたのを覚えています。

宗教改革は、免罪符を売ったお金を貯めておく箱に代えて、もう一つの箱、貧しい人のための共同金庫（財庫）を作り出したのです。

その運用規定も残っています。それによると日曜日毎に、鍵の持ち主の一人である市長のもとで集まって、だれに援助するか協議され、実行されます。ヴィッテンベルクでは乞食をすることが禁じられていました。年をとっても病気になるっても乞食はできない。働くことを求められるか、町から追い出されました。托鉢修道僧も制限されていきました。乞食を禁じられ、その代わり病氣その他で困窮している人や家庭には共同金庫から援助金が支出されましたし、貸し出しもなされました。乞食が禁じられたというのは理由があります。中世では乞食が必要だったのです。お金持ちがお金を恵んでやる、善行をする、功德を積むチャンスとして乞食や貧しい人が必要だったので。宗教改革はまさにそれを否定した。人は善行によって救われるのではない。そして貧しい人びとのためこうした仕組みをつくることで彼らを助け、共同で施しをおこなったのです。

一つ付け加えておきます。ヴィッテンベルクのルターの教会では、礼拝（ミサ）の最後で、派遣の言葉の代わりに、献金がなされていたようです（教会規定）。これも共同金庫の財源です。教会の運営は君主の治める国（領邦）の予算でなされていたのでこの献金は純粋な喜捨です。この伝統を引き継いででしょうか、聖餐式には必ず献金し、それを外部の援助、諸教会の援助などに使うとしている教会が日本にもあります。聖餐式と献金の関係はまだ調べてみたいと思いますが、いずれにせよ豊かな恵みに富む神、この神への感謝の思いをもって、私どもも心に決めた通り喜んで捧げ、神の愛の業に仕えたい。これまでそういう教会であったように、これからもそうした教会でありたいと思います。

（二〇一八年一〇月七日）